

## 石川県の氷室（雪室）の調査リスト

竹 井 巖, 神 田 健 三\*, 小 川 弘 司\*\*

List of "Himuro"s (snow cellars) checked on documents  
and field works in Ishikawa

Iwao Takei, Kenzo Kanda\*, Hiroshi Ogawa\*\*

*Received October 30, 2009*

### Abstracts

A List of "Himuro"s (snow cellars), which were used in Ishikawa prefecture, is presented. This list was made by checking the description of related district documents and researches of field works in Ishikawa. It is shown in the list about the name of the "Himuro" and the location, size, the use time, the present situation, the purpose of use. The number of "Himuro"s ridden in the list is 63.

キーワード：氷室，雪室，貯蔵雪氷，雪氷利用，雪氷冷熱エネルギー資源

### 1. はじめに

冬期間に採取した氷を貯蔵し，夏の時期に冷却材として利用することは中国の周や秦の王朝をはじめとして世界各地で古くから行われてきた<sup>1)</sup>。日本でも，長屋王の木簡<sup>2)</sup>から明らかに，奈良時代には氷室と呼ばれる氷の貯蔵施設を用いた氷利用がすでに行われている<sup>3)</sup>。冬期間に多量の積雪がある北陸地方では，氷の代わりに雪を貯蔵し夏に利用することが江戸時代には行われてきた<sup>4)</sup>。

石川県でも，冬の雪を貯蔵するための施設として，江戸時代の金沢城の氷室<sup>4)</sup>や，明治大正期の金沢や大聖寺近辺に多数の氷室（雪室）が営まれたことが知られている<sup>5,6)</sup>。これらの貯蔵雪の夏場の有り様は，風物詩として金沢の氷室の日の「雪の水」「白山氷」「がばり」の言葉として，たとえば大正9年の泉鏡花の「寸情風土記」や「石川県河北郡誌」に引用された新

---

教育能力開発センター  
Center of Development for Education

\* 中谷宇吉郎雪の科学館  
Nakaya Ukichiro Museum of Snow and Ice

\*\* 石川県環境部自然保護課  
Nature Conservation Division of Environment Department, Ishikawa Prefecture

聞記事, 井上雪「金沢の風習」などに活写されている<sup>7-9)</sup>。また, 鮮魚の冷蔵や医療用の熱冷ましへの貯蔵雪の利用は, 明治以降の庶民にとって身近なものであった<sup>6,10,11)</sup>。しかし, 大正期以降の人造氷の普及にともなって, 採取貯蔵雪氷は徐々に利用されなくなり, これらの貯雪施設としての氷室(雪室)も昭和30年代には営まれなくなった。金沢の湯涌温泉観光協会による昭和62年からの復元氷室(図1(a)(b))の運用例を除けば, 氷室(雪室)の様子を知ることが困難となっている。

さて, 北陸地方に冬期間に降り積もる多量の雪は, 水資源や観光資源としての重要性が認識されてきたのではあるが, さらに近年は新しい観点から雪氷冷熱エネルギー資源<sup>12)</sup>としても注目されつつある。これは, かつて先人たちが貯蔵雪として利用してきた延長線上に位置づけられる事でもある。過去の氷室(雪室)の運営と貯蔵雪氷の利用の実態を確認することは, 石川県の資源としての雪氷を検討する上で, 大変参考になると考えられる。たとえば, 先人たちがささやかな道具や労力で苦勞しながらも雪氷利用に成功していた氷室(雪室)の存在は, 雪氷利用の適地である可能性が高いので, これらの石川県における分布は資源としての雪氷を考える上で意味ある情報を示すものと思われる。

金沢旧市街地域に営まれた氷室の調査は, 関係者への聞き取りを行って示された北島俊朗氏の「金沢の氷室」(昭和57年(1982))<sup>10)</sup>があり, また, 池上佳芳里氏の北陸地方全般の市町村史や資料調査, 聞き取り等によって示された「北陸地方における雪室の分布とその盛衰」(平成11年(1999))<sup>11)</sup>がある。また, 近年の著者らによる石川県の氷室(雪室)の実態の調査も行われてきた<sup>4,6)</sup>。

本小論では, 先行論文の調査結果を踏まえて, 現時点で確認できる資料や聞き取り調査実施の結果を付加整理し, 石川県の氷室(雪室)の痕跡を調査リストの形で示すことにある。

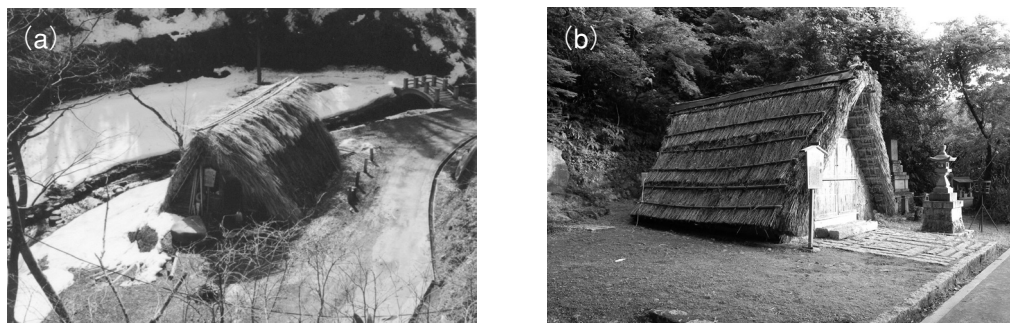


図1 湯涌温泉の復元氷室。(a) 初代復元氷室(昭和62年-平成14年, 玉泉湖畔:金沢24), (b) 二代目復元氷室(平成15年-, 薬師寺境内:金沢25)。

## 2. 氷室(雪室)の調査リストについて

本リストに整理した氷室(雪室)は, 古文書や市町村史, 研究論文等の文献で確認できるもの, および聞き取り調査などで得られたものをできるだけ載せた。可能ならば, 場所の確認や現地調査を行った。石川県で盛んに氷室(雪室)が営まれたのは今から80年以前のことなので, 場所や様子を特定することは困難であった。また, 確認がとりにくい情報も氷室(雪室)のあ

表1 石川県の氷室（雪室）リスト 本リストに整理した氷室（雪室）は、古文書や市町村史、研究論文等の文献で触れられたものの、および聞き取り調査などで得られたものを載せてある。氷室（雪室）の名称、位置と規模、利用時期、現状および利用目的等の情報を、得られた情報の範囲で整理して記載した。

	金沢市（氷室名称）	所在地	立地	大きさ	使用時期	現状	目的	確認資料
1	金沢城玉泉院丸氷室	丸の内3（金沢城玉泉院丸）	丘上	2間×4間	1692-?	公園	儀式	森田「金沢古蹟志」 <sup>13)</sup>
2	金沢城二の丸氷室	丸の内1（金沢城二の丸）	丘上	2間×4間	藩政期?	公園	儀式	天野「製氷の歴史」 <sup>17)</sup>
3	近江町の穴	近江町			藩政期		魚鳥貯蔵	森田「金沢古蹟志」 <sup>13)</sup>
4	兼六園山崎山貯雪窖	兼六園山崎山麓	丘上		藩政期?		儀式	小川「兼六公園誌」 <sup>19)</sup>
5	兼六園米室跡池	兼六園山崎山裏池	丘上	20m×10m	明治・昭和?	池		下郷「兼六園歳時記」 <sup>20)</sup>
6	(北島1) 十全東	小立野2-23 十全病院東側	丘上	170坪×18尺	1898-1932	病院	病院料亭魚屋	北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
7	(北島2) 橋詰北	小立野2-29 (39?)-8 橋詰菓子店	丘上	80坪×18尺	1932-1945	宅地	病院料亭魚屋	北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
8	(北島3) 二中東	石引3-7-31 紫錦台中東側	屋上	6間×10間×16尺	1921-1930	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
9	(北島4) 分院	小立野2-24-45	屋上	6間×4間×9尺	1930-1939	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
10	(北島5) 尾山南	尾山町 尾山神社境内南端		8間×10間×18尺	大正初期-1944	碑有り		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
11	(北島6) ババ坂	小立野2-2 (24?)-41 ババ坂上	斜面	4間×8間×33尺	1924-1943			北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
12	(北島7) 宝門西	宝町3-1・2 宝門寺西側	斜面	4間×8間×33尺	1924-1943	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
13	(北島8) 如来横	小立野5-1-5 如来寺横		不詳	1919	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
14	(北島9) 一番山	小立野2-20-14	丘上	300坪×30尺	1924-1935	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
15	(北島10) 笹下町	寺町5-9-12・13		6間×10間×30尺	1911-1945	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
16	(北島11) 尾山北	尾山町 尾山神社境内北端		6間×10間×13尺	1912-1935			北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
17	(北島12) 小坂南	山ノ上町43-21 小坂神社南		10間×10間×12尺	1924, 1927	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
18	(北島13) 大門寺	寺町5-3 大門寺境内		4間×6間	1932			北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
19	(北島14) 立像寺	寺町4-1 立像寺境内		4間×6間	1932			北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
20	(北島15) 弥生	弥生3-7		140坪×18尺	1939-1943	宅地		北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
21	近江町の空井戸	近江町			大正時代		魚冷蔵	北島「金沢の氷室」 <sup>10)</sup>
22	近江町市場サンボン	近江町		10畳, 3穴	大正時代		魚冷蔵	「近江町市場史」 <sup>29)</sup>
23	月浦町氷室	月浦町 (N36°36'8"E136°42'9")	谷筋	5m×10m×3m	大正-昭和初期	穴現存	近江町市場納入	竹井「石川県のー」 <sup>5)</sup>
24	湯涌温泉復元氷室①	湯涌温泉玉泉湖畔	屋上	2間×4間×3m	1986-2002	穴現存	観光イベント	
25	湯涌温泉復元氷室②	湯涌温泉薬師寺境内	屋上	2間×3間×3m	2003-	建物	観光イベント	

かほく市 (氷室名称)	所在地	立地	大きさ	使用時期	現状	目的	確認資料
1 宗廣雪囲蚕種貯蔵所	河北郡高松村字高松九番地			大正11年3年		蚕種貯蔵調整	「蚕業取締成績」 <sup>32)</sup>
2 南雪囲蚕種貯蔵庫	河北郡高松村字高松ノ四三			大正5年6年		蚕種貯蔵調整	「蚕業取締成績」 <sup>32)</sup>
3 實力館蚕種貯蔵所	河北郡宇野気村字宇野気			大正3年6年		蚕種貯蔵調整	「蚕業取締成績」 <sup>32)</sup>
4 高松砂丘米室	高松町北新町?	砂地		昭和初期		漁師 (冷蔵)	情報 (竹田武氏) <sup>30)</sup>
5 高松六軒町雪小屋	高松町六軒町	砂地	2間×1.5間×4尺	昭和初期		旅館 (冷蔵)	情報 (丹羽修平氏) <sup>31)</sup>
白山市 (氷室名称)	所在地	立地	大きさ	使用時期	現状	目的	確認資料
1 松任倉光雪ノ氷小屋	白山市倉光町	平地		大正-昭和初期			「松任市史」 <sup>33)</sup>
2 松任三浦雪ノ氷小屋	白山市三浦町	平地		大正-昭和初期			「松任市史」 <sup>33)</sup>
3 白峰市ノ瀬雪室	市ノ瀬 (N36°6'52"E136°42'3")	川岸	4.5m楕円×3.1m	昭和30年前後	穴現存	永井旅館 (冷蔵)	情報 (山田秋さん) <sup>35)</sup>
4 白峰雪室	白峰支所付近の崖地	崖上		昭和20年代	痕跡無	北野魚店 (冷蔵)	情報 (山田秋さん) <sup>35)</sup>
加賀市 (氷室名称)	所在地	立地	大きさ	使用時期	現状	目的	確認資料
1 小野坂米室	畑町 (N36°19'3"E136°18'52")	崖上		-大正期?	畑地	魚屋, 一般	「加賀市史」 <sup>36)</sup>
2 大聖寺荻生町米室	稲荷神社社殿右後方境内 (N36°18'32"E136°17'53")	崖上	7m×4m×4m	-大正期?	穴現存		情報提供
3 大聖寺本光寺米室	大聖寺神明町4	崖地		明治-昭和	穴埋戻	魚町の魚屋	情報 (奈良諦順氏) <sup>37)</sup>
4 吸坂雪穴	吸坂町	崖上			不詳	魚屋	情報提供
5 橋立町雪穴	加賀市橋立町144 (N36°21'6"E136°18'32")	崖上		大正期	穴現存	魚冷蔵	情報 (酒谷恵美子氏) <sup>38)</sup>
6 橋立小学校雪穴	橋立小学校校庭付近				破却		情報 (酒谷恵美子氏) <sup>38)</sup>
7 橋立出水神社雪穴	加賀市橋立町ホ (社殿右後方) (N36°20'53"E136°18'36")	崖上	径7m深さ5m すり鉢		穴現存	魚冷蔵	情報 (酒谷恵美子氏) <sup>38)</sup>
8 塩浜	加賀市塩浜町1-16	砂地	半地下コンクリート造	昭和初期	破却	魚冷蔵	情報 (塩谷健一氏) <sup>39)</sup>
9 伊切浜	加賀市伊切町	砂地					情報提供
10 片山津米室 (雪穴)	加賀市片山津温泉一区84-3 (N36°20'33"E136°21'55")	丘陵 谷筋	9m×7m×5(?)m	大正-昭和初期	穴痕跡	坂口魚屋 (冷蔵)	情報 (坂口富子さん) <sup>37)</sup> 竹井「大正期-」 <sup>6)</sup>
11 打越 (東端) 雪穴①	打越町ち90	崖上	3間×3間×3間	昭和20年以前	宅地	料理屋, 熱冷し	和泉調査 <sup>4)</sup>

[illegible]

った可能性を排除できないので、リストに載せてある。リストには、氷室（雪室）の名称、位置と規模、利用時期、現状および利用目的等の判明している情報を整理して載せた（表1）。

### 3. リストに掲載した各氷室（雪室）の解説

#### 3-1 金沢地区（金沢近郊を含む）

＜金沢旧市街地域＞ 藩政期の金沢城の玉泉院丸に元禄5年（1692）以降氷室が営まれていたことが確認できる<sup>13-15)</sup>。この氷室（金沢1）は、戸室石で築かれた2間4間の穴蔵で、藩主の氷室の日の儀式用の雪水を貯蔵するために用いられた。清浄な雪を木箱に詰めて、氷室に設置し、まわりを雪で覆って貯蔵したとされる。玉泉院丸には泉水のある庭園があり、庭園の世話をする手木足軽が氷室の管理をしていたという。現在、金沢城玉泉院丸は、公園整備のための発掘調査が行われており、戸室石造りの穴蔵であるこの氷室の地下遺構は残存している可能性が高いので、構造等の判明することが期待される。

金沢城における雪水利用に関しては、1692年以前では、前田利家の金沢城入城の天正12年（1584）に遡って犀川上流の倉谷四ヵ村から氷室の日の祝いの水を運んできていたという<sup>15)</sup>。1692年以後でも金沢城の氷室の水が融けてしまった時には倉谷から運ばせているので、倉谷には貯蔵雪があったことになる。もちろん倉谷は犀川上流の山奥なので、山陰の残雪が豊富でそれを求めに応じて運んだ可能性が高い。しかし、1600年代の倉谷は金銀鉱山が営まれ、最盛期には寺社遊郭もある400戸の大集落であった<sup>16)</sup> というので、氷室のような手間をかけた貯雪施設があった可能性も残る。

金沢城の二の丸に氷室（金沢2）があったという大正期の伝聞がある<sup>17)</sup>。金沢城二の丸では由来不明の穴蔵も発掘されている<sup>18)</sup>。しかし、藩政期の文献に二の丸の氷室の言及は確認されていない上に、宏大な二の丸は御殿の何度もの焼失や明治以降の軍隊や大学の施設建設等で攪乱されていて、発掘等で確認することは望めないようである。

金沢城に隣接する兼六園の山崎山の「山背二土窖ヲ作り」氷室（金沢4）として用い、藩侯に供したという話が、明治27年の「兼六公園誌」<sup>19)</sup>に記載されている。この兼六園の氷室は、山崎山のそばの外総構堀の痕跡が池となっている場所を比定して、「氷室跡池」と地図などに記載されたりする。兼六園管理事務所長であった下村稔氏によると<sup>20)</sup>、「兼六園の氷室跡（金沢5）は、明治以降から昭和の半ばに庶民の氷室として使われたために、現在のような表示になった」とし、藩政期の絵図<sup>21)</sup>（1839）ではその場所は谷となっているだけなので、藩政期に営まれた氷室があったかどうかについては疑義を表明されている。ところで、明治31年の「兼六公園之略景」をはじめとして多くの案内図や解説書に山崎山の麓に「貯雪窖趾」「氷室址」などの文字が認められる<sup>22-26)</sup>。「趾」や「址」との表記は、下村氏のいう明治期以降に営まれたとされる氷室とは異なる藩政期の「氷室跡」を示している可能性がある。長山直治氏の「兼六園を読み解くその歴史と利用」<sup>27)</sup>によると、兼六園は当初十二代藩主斉広による文政5年（1822）造営の竹沢御殿の庭に対して称され、十三代藩主斉泰による竹沢御殿破却と庭園としての増改築後の万延元年（1860）ごろに蓮池庭と一体化されて現在の庭園の規模になったとされる。加賀藩では伝統的に氷室を管理していたのが露地（庭園）担当の手木足軽であった<sup>13)</sup>

ので、竹沢御殿の庭園としての兼六園を世話するために足軽が玉泉院丸から移って来ていたとすれば、藩政期に兼六園の山崎山の「山背」に氷室が営まれていた可能性は高くなる。ここでは、兼六園の氷室は、明治期以降に営まれた山崎山そばの総構堀跡の池を用いたもの（文献等では必ずしも確認できないのだが）と、藩政期末に山崎山の「山背ニ土窖ヲ作」って営まれた別物の氷室とが存在した可能性があることを指摘するため、リストに掲載した。

さて、石川県統計書から抽出した明治大正期の金沢旧市街地域の氷雪営業における雪貯蔵の登録業者は、大正10年から12年に最盛期の15件を数える<sup>5)</sup>。北島氏の「金沢の氷室」<sup>10)</sup>でリストに記載されている明治大正昭和期の氷室（金沢6-20）＝（北島1-15）は、小立野台地に11、卯辰山山系に1、寺町台地に4の計15カ所である。もちろん氷室の所在地と所有者の登録業者の所在地とが所轄警察署の担当領域において一致しているとは限らないし、一業者が複数の氷室を所有する例もあるので、必ずしも雪貯蔵の登録業者数と氷室の数に対応関係があるわけではない。しかし、登録業者数はその地域の氷室（雪室）の数の規模を反映しているものと考えられるので、以下参考のために雪貯蔵の登録業者数を記載してある。

これらの氷室は、大都市金沢の魚市場、料亭の冷蔵用や病院の医療研究用等の貯蔵雪氷の需要に合わせて、台地上に設置された規模の大きな土坑であることが特徴である。現況は、小立野台地のほとんどは宅地になっていて、痕跡を確認できない。尾山神社南側の氷室跡のみ、所在地跡に碑が建てられている。卯辰山山系の小坂神社前や、寺町台地の寺院の境内にあったとされる氷室も、北島氏の調査時点で不詳となっている。

近江町市場には、藩政期に「近江町の穴」（金沢3）と呼ばれる藩の魚鳥を貯蔵した施設があった<sup>28)</sup>。これは貯蔵雪を利用したものと考えられている<sup>29)</sup>。また大正期には、市場内に魚を貯蔵した「空井戸」（金沢21）<sup>10)</sup>や魚問屋の「冷蔵用の穴蔵」（金沢22）<sup>29)</sup>が貯蔵雪を利用していた。夏期には小立野<sup>10)</sup>や森本<sup>5)</sup>の氷室から雪を搬入して使用していたようだが、尾張町などの近隣から冬期の積雪を運び入れて<sup>29)</sup>貯雪していたようでもあるので、これらも一種の氷室（雪室）と言える。現在では痕跡を確認できない。

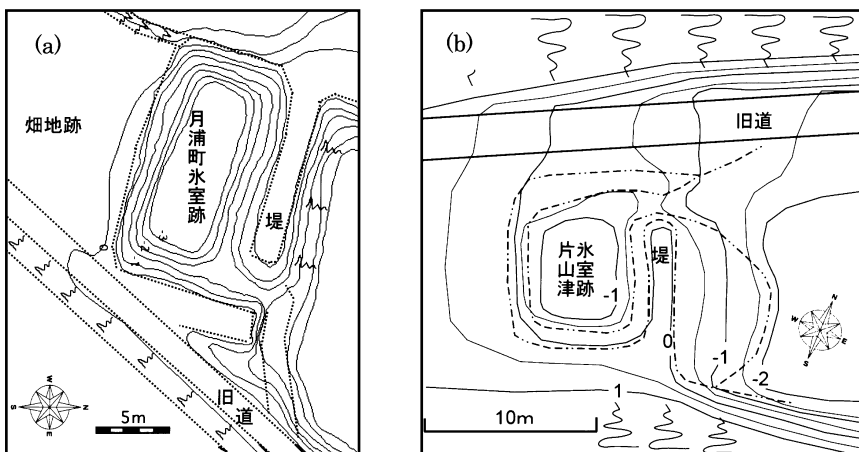


図2 (a) 月浦町氷室（金沢23, N36°36'8" E136°42'9"）および (b) 片山津氷室（雪穴）（加賀10, N36°20'33" E136°21'55"）の測量図。どちらも丘陵の谷筋に設けられた氷室で、穴を掘り、谷下側に堤を設けている。堤の一部を切り下げ、出入口にしていた。使用時期は大正昭和初期。

＜旧河北郡地域＞ 石川県統計書によると津幡・旧河北郡では、大正11年で登録雪貯蔵業者が最盛期の45件となっている<sup>5)</sup>。これらの貯蔵業者の所有したと考えられる氷室のひとつが、金沢市の北部の北陸道森本インターそばの山林に、月浦町氷室跡（金沢23）として確認できる<sup>5)</sup>。この氷室の現況は竹林に位置し、10m×5m×3mの長方形の素堀りの穴が良好な状態で残存している（図2（a））。丘陵の谷筋に穴を掘り、谷下側に堤を築いたもので、堤の一部が出入り口として低くなっている。まわりから雪を集めて穴に落とし込み、屋根掛けして使用したものと考えられる。この氷室は大正昭和初期に営まれた氷室で、その貯蔵雪は9 km離れた金沢の近江町市場にリヤカーで運搬され納入されていた。谷筋に設けられ、堤の一部を出入り口としている点や、鮮魚の冷蔵材としての用途で営まれた点など、大正昭和期の氷室の1つの典型として重要である。

現在のかほく市にある旧河北郡高松町に氷室があったと2007年に情報が寄せられた。高松町の中沼に以前住んでおられた竹田武氏の話によると<sup>30)</sup>、昭和15年以前に漁師さん所有の砂丘上（北新町）に営まれた氷室（かほく4）があったという。合掌屋根の藁造りで、オガクズを使っていた。また、竹田氏に紹介していただいた同級生の丹羽修平氏の話では<sup>31)</sup>、高松の六軒町の氷室（「雪小屋」と呼んでいた：かほく5）を覚えておられた（昭和5、6年の記憶）。旅館の持ち物で、冷蔵用途。切り妻屋根で、砂地に穴を掘って作った構造であった。現況は確認できなかった。

高松町の氷室に関しては、旧河北郡では養蚕の盛んな時期があり、蚕種の活動調整のために貯蔵雪を利用していたことが、農商務省農政局の大正初期の「蚕業取締成績」<sup>32)</sup>という書類の記載から窺える。ここでは、雪圍（ゆきかこい）の項目に石川県の宗廣雪圍蚕種貯蔵所（宗廣文治、河北郡高松村字高松九番地、大正1、3年：かほく1）、實力館蚕種冷蔵庫（森成次郎、河北郡宇野気村宇野気、大正3、6年：かほく2）、南雪圍蚕種貯蔵庫（南宇太郎、河北郡高松村字高松オノ四三、大正6年：かほく3）が確認できる。雪圍はまわりを雪で囲んだ冷蔵庫（雪室）、または貯雪室を併設した冷蔵庫のことなので、氷室（雪室）の一種である。

＜白山市域＞ 松任・旧石川郡では、大正5年で登録雪貯蔵業者が最盛期の5件となっている<sup>5)</sup>。白山市の松任地区に2カ所氷室（「雪の氷小屋」と呼ばれていた：白山1、2）があったことが、松任市史に記載されている<sup>33)</sup>。「倉光、三浦などに石垣で囲いピラミッド型の屋根

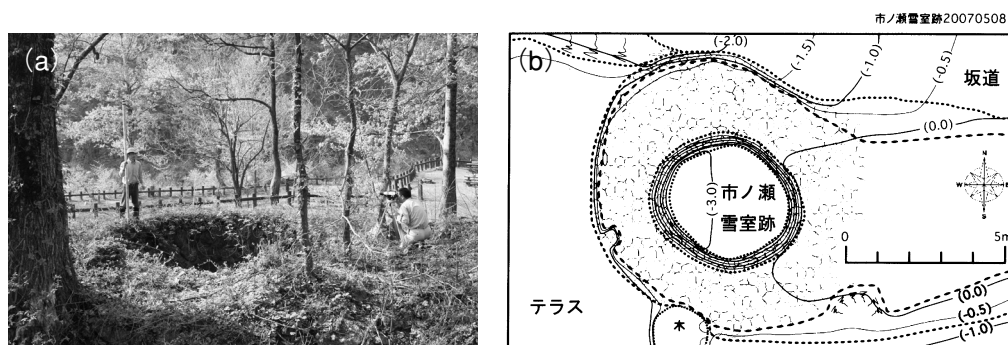


図3 白山市白峰地区市ノ瀬の雪室（白山3、N36°6′52″ E136°42′3″）（a）外観写真、（b）市ノ瀬雪室の測量図。川原石をコンクリートで固めた構造。永井旅館が冷蔵用に自家使用した。使用時期は昭和30年前後。



を葺いた「雪ノ氷小屋」があり、「いきのこおり」といって、毎年各地へ売りさばかれたが、大正末から昭和初期にかけて姿を消していった」とある。富山県黒部市金谷の雪山<sup>34)</sup>のように平野部の氷室であるので、穴を掘る構造ではなく、石垣で土台を作って雪を積み上げる雪山のような構造だったと推測される。詳細は不明である。

白山市の山間地である白峰地区に、2カ所ほど氷室があったとの情報が得られた。1つ（白山3）は、市ノ瀬の永井旅館が昭和30年前後に設けたもので、川原石を積み上げてコンクリートで補強した径4 m深さ3 mの楕円柱状の穴蔵が、石川県白山自然保護センターの市ノ瀬ビジターセンターの建物の河川敷側に現存している（図3（a）（b））。従業員だった山田秋さんの話では<sup>35)</sup>、雪室と呼んでいたという。永井旅館で使う料理の冷蔵用に用いていたが、金沢や鶴来に魚を買い出しに行くときには、トラックに冷蔵庫を積み、その冷蔵材として用いた。もう1カ所（白山4）は、白峰の白山市白峰支所の付近の崖地にあったもので、北野魚店の所有であったという。昭和20年代に営まれた。現在は痕跡を認めることができない。

＜湯涌温泉の復元氷室＞ 湯涌温泉観光協会が、昭和62年に金沢市の湯涌温泉の玉泉湖畔に氷室（図1（a））を復元して以降、実際に冬期間の雪を貯蔵し、6月30日の氷室開き、7月1日の氷室の日の県知事と市長への雪氷を献上するイベントを継続して行っている。このように20年以上の長期間にわたって継続して雪貯蔵と氷室の運営を実際に行う例は、全国的にも貴重なものといえる。湯涌温泉の復元氷室は、2間4間の金沢城玉泉院丸氷室の大きさを参考に作られ、地下はコンクリート構造の穴蔵である。穴の上部に切り妻作りの素朴な藁葺きであった初代氷室（昭和62年から平成14年使用、玉泉院湖畔、図1（a）：金沢24）と立派な茅葺きの2代目氷室（平成15年から使用、薬師寺境内、図1（b）：金沢25）が復元された。初代の氷室が敷地問題のトラブル等で使用ができなくなり、薬師寺の境内に2代目を新たに復元することになった経緯がある。そのため、初代と2代目の氷室は立地の制限や違いで氷室の大きさや日当たり等が異なり、貯雪能力に差異が生じているようである。なお、この湯涌温泉周辺地域には、過去に氷室がいくつか営まれていたと伝えられるが、詳細は不明である。

### 3-2 加賀地区（金沢以南）

＜加賀市域＞ 加賀市域（大聖寺・旧江沼郡）では、大正14年で登録雪貯蔵業者が最盛期の27となっている<sup>5)</sup>。今回の調査では、氷室の分布をみると、大聖寺藩の城下町であった大聖寺地区に5、海岸や柴山潟の周辺に位置する橋立・片山津地区に8、温泉や保養施設のある山代・山中地区に10の、計23件の氷室（雪室）が確認できた。

大聖寺地区では、加賀市史に触れられている小野坂の氷室（加賀1）が有名であったようで、氷室の日にこの氷室の貯蔵雪が売りに出されていた<sup>36)</sup>。使用時期は不明だが、明治大正期と考えられる。所在位置は、大聖寺から畑町に上がる道のそばで現在のトンネルの手前の道路が大きくカーブする場所にあった。現況は、道路端の崖上の畑地になっていて、残念ながら痕跡は確認できなかった。

大聖寺の城山である錦城山の西側に位置する荻生町の稲荷神社境内に、氷室（加賀2）が残っている（図4（a））。神社拝殿の右後方にあり、崖際に7 m × 5 m × 4 mの土坑が現存している。使用時期は明治大正期と思われる。

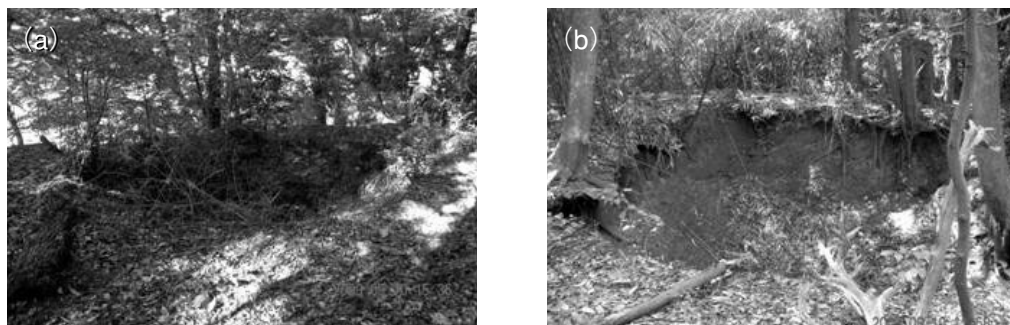


図4 (a) 加賀市荻生町の稲荷神社拝殿右後方の氷室跡（加賀2, N36°18′32″ E136°17′53″）, 縦7m×横4m×深さ4mの素堀の穴, (b) 加賀市橋立町の出水神社拝殿右後方の雪穴跡（加賀7, N36°20′53″ E136°18′36″）, 径7m深さ5mのすり鉢状の素堀の穴が残っている。

大聖寺神明町にある本光寺には、隣の宗寿寺との境界の崖下に氷室（加賀3）が営まれていた。奈良諦順住職の話では<sup>37)</sup>、明治時代から近くの魚町の魚屋と契約書を交わしてこの氷室が営まれていたという。広さは10畳くらいで、かなり深かった。昭和40年代に埋め戻され、現在は崖地下に段があるだけである。また、吸坂町の崖上に氷室（加賀4）があったとされるが、正確な位置を確認できなかった。

橋立・片山津地区には、海岸に近い橋立に3カ所、塩浜町に1カ所、伊切町に1カ所あり、また柴山潟に面した片山津の山林に1カ所、動橋の北の打越に2カ所あったとの情報が寄せられた。

橋立町在住の酒谷江美子さんの話では<sup>38)</sup>、橋立港の西側の橋立町にある丘陵先端部に氷室（雪穴と呼ばれていた：加賀5）が大正中頃から祖父によって営まれ、その貯蔵雪を橋立の魚屋さんが魚の冷蔵に用いていた。この雪穴（橋立町雪穴）は民家の裏の山の上に位置し、雪穴に行くのにはしごを使って登り降りしていた。現在も土坑が残っているという。また、橋立の小学校が位置する丘陵と、出水神社の境内にも氷室（雪穴）があったという。小学校の丘陵の氷室（加賀6）はグラウンド造成で消滅したという。しかし、出水神社境内の雪穴（加賀7）は、拝殿の右後方の崖際に径7m深さ5mのすり鉢状の土坑が現存していた（図4（b））。

橋立港地区から東側に隣接する位置にある塩浜町の集落には、地元の塩田健一氏の話では<sup>39)</sup>、砂地の場所に設けられた半地下式の防空壕のようなコンクリート製の氷室（加賀8）が営まれ、浜から揚がる魚の冷蔵用に昭和初期に営まれたという。残念ながら、最近壊されて民家の畑地になっている。また、伊切町にあった伊切浜の氷室（加賀9）は、現在の北陸道片山津インター付近に位置したとされるが、詳細は不明である。

片山津の氷室（加賀10）は、竹井・神田によって2006・2007年に調査され、片山津温泉街の西側の丘陵の竹野坂と呼ばれる谷筋に設けられていたことが確認された<sup>6)</sup>。この氷室（図2（b））は7m×10mの規模の長方形で、谷下側に堤と出入り口を設けている構造は、金沢月浦氷室（金沢23）と同型である。穴の現況は、危険防止のため廃材で埋め戻されて1mくらいの深さしかないが、谷下側の堤の様子がよく判別できる。所有者の坂口富子・岡田修三さんの話によると<sup>40)</sup>、大正昭和初期に坂口魚店によってこの氷室（雪穴と呼ばれていた）は営まれ、貯蔵雪は魚の冷蔵に用いられていた。また、橋立から安宅・今江潟・柴山潟を経由して運ばれた魚

を雪穴の貯蔵雪で冷蔵して、温泉電軌の電車と動橋駅経由で国鉄を用いて関西方面に出荷していたという<sup>6)</sup>。

動橋駅の北東に位置する打越町の氷室は、2カ所あり、新潟大学の和泉薫氏によって聞き取り調査がされた<sup>41)</sup>。これらの氷室は雪穴と呼ばれていた。一つ（加賀11）は組合の運営で、貯蔵雪は熱冷まし用や料理屋に販売され、もう1つ（加賀12）は魚屋さんの運営で、魚の冷蔵に用いられた。打越集落は小高い丘の上にあり、それぞれの雪穴は丘陵の東端崖上と南西端斜面中腹に営まれていた。現況は、畑地と宅地になっていて、痕跡は認められない。

山代・山中地区の氷室（雪穴と呼ばれていた）は、山代地区に6カ所、山中地区に4カ所の情報が寄せられた。

山代地区では、温泉街の東側にある丘陵に氷室が5カ所集中して営まれた。この中で、べにや旅館が所有している2カ所の氷室（加賀13、14）が穴を確認できるが、危険防止のため落ち葉や切り木が詰められている。べにや旅館の氷室は、旅館が現在地に移ってきたときに設けられたもののようで、昭和期の比較的新しい自家用のものと思われる。丘陵の南端にある万松園には、山代温泉在住の西山外茂子さんと小松魚店の谷本和江さんの話によると<sup>43)</sup>、藤沢（加賀15）と紋谷（加賀16）の2つの雪穴があったという。藤沢の雪穴は昭和31年まで営まれたようで、魚屋への納入や一般の熱冷ましなどに用いられていたという。万松園の東側崖際に雪穴のものと思われる崩れたくぼみが認められる。また、丘陵の北西端の旧春日神社境内にも雪穴（加賀17）があった。明治－昭和初期に営まれた仕出し屋（現在寿司屋の平八）の娘さんだった山下シヅ枝さんの話では<sup>42)</sup>、この雪穴は、旅館へ提供する料理の魚などの生ものの冷蔵用に貯蔵雪を使うため、祖父と父親が土地を借りて自家用に営んだものだという。昭和の早い時期には冷蔵庫の導入で使用しなくなった。地元の人の話では、広さ10畳深さ3m、藁屋根葺きの廃屋が昭和30年代まで残っていたという。この旧春日神社境内の氷室は、神社の移転とホテル雄山閣の造成によって消滅している。これら春日神社と万松園の雪穴については、「やましろ街事典」にも触れてある<sup>44)</sup>。なお、山代温泉の東に位置する上野町丸山団地裏の丘陵にも昭和20年代まで氷室（3間×2間×深さ1.5間：加賀18）があったが、介護施設の造成で痕跡は残っていない（田島昭夫氏の情報提供）。

山中地区の氷室は、菅谷町の2カ所（加賀19、20）と栢野町の2カ所（加賀21、22）が、2009年に刊行された「大聖寺川上流域の歴史」<sup>45)</sup>に記載されている（中谷宇吉郎雪の科学館友の会の田中政次氏の情報提供）。これらの氷室（雪穴と呼ばれていた）は、菅谷では昭和16年頃から昭和35年まで、栢野町では大正12年から昭和30年代後半まで営まれていた。主に山中温泉の旅館や料亭などの冷蔵庫用に、貯蔵雪を供給していたが、電気冷蔵庫の普及で廃業することになった。

地域おこしの一環で、平成15年に大聖寺の街中のシンボルとして時鐘堂が再建されたときに、その建物の下部にコンクリート造りの氷室（加賀23）が設けられた。竣工を記念して雪貯蔵のイベントが行われたが、残念ながら氷室としての貯雪能力は十分ではなかったようである。

### 3-3 能登地区

<七尾市域> 七尾・旧鹿島郡では、大正14年で登録雪貯蔵業者が最盛期の7となっている。

七尾地区の水室については、昭和59年の「七尾の地方史」第17号に記載されている木村良一「明照館と氷室跡」に、5カ所の氷室の存在が触れられている<sup>46)</sup>。①七尾市江泊町の日室という部落に大きな氷室（七尾1）の跡が残っているという。江泊漁港の魚の冷蔵のために利用されたいとの言及があるが、詳細不明である。日室は「日室の鎌まつり」で有名だが、定住者の減少で現在はほぼ廃村状態になっている。現況等を確認ができなかった。②七尾の小丸山城にある角力場の位置が、もと氷室跡（七尾2）だったという。付近の魚町の魚屋に貯蔵雪を供給していたらしい。③「和倉小学校前にも昭和になってからもかなり遅い時期まで氷小屋、氷室があった」とある。「氷小屋または氷室」と呼ばれていたらしい。この氷室（七尾3）は、池上の論文で「端村」の雪室として集計されているものであろう。詳細不明。④「万行町の清右衛門の別宅万清園の一画にも氷室氷小屋があった」とある（七尾4）。⑤矢田町の通称明照館の森の一角に氷室があったという。この矢田明照館氷室（七尾5）に関しては、七尾市教育委員会文化課が測量した実測図が、この木村氏の論文に掲載されている。堤を巡らせて作った内部21m×12.2m×3.1mの長方形のプールのような氷室である。堤の2カ所に入出入口が設けられている。作事町の魚問屋の所有で、魚の冷蔵用に用いられ、「魚箱にこの天然氷がつめられて貨車に積送されたと聞いた」とあるので、この氷室の貯蔵雪は七尾港に陸揚げされた鮮魚を矢田新駅や七尾駅から輸送するのに用いられたものと考えられる。明治大正期に営まれていた。昭和58年ごろの宅地開発で消失したようである。

<その他> 旧羽咋郡では、大正3年から7年にかけて登録雪貯蔵業者が3となっている<sup>5)</sup>。羽咋市史に、宝塚から出土した「土面の裏面に「石川県羽咋郡羽咋町字稲荷山宝塚ヨリ明治四十一年六月雪野蔵ノ為掘鑿セシ処ヨリ発見 古川晃吉」の張り紙がある」との記載がある<sup>47)</sup>。羽咋市の羽咋宝塚古墳に氷室（雪野蔵と呼んでいたらしい：羽咋1）を設けようとしたらしい。現況は「宝塚（稲荷山）」と呼ばれ、丘の頂部に墓があり、氷室としての痕跡は確認できない。詳細不明である。

#### 4. まとめ

石川県では、石川県統計書によると大正14年時点で112の雪氷営業の登録雪貯蔵業者がいたことが確認できる<sup>5)</sup>。1業者が複数の氷室（雪室）を運営していたり、異なる時代・期間の使用例や私的なものもあったと考えられるので、石川県で使用された氷室（雪室）の数は百カ所を大きく超えるものと考えられる。ここにリストで記載された63件は、その一部にすぎない。石川県で営まれたはずの氷室（雪室）は、存在自体が多くは不明であり、文献や聞き取り調査での手がかりをもとにリストに掲載したものであっても、現地調査で確認できる痕跡を残しているものは数えるほどしかない。

聞き取り調査では、幼い頃の貯蔵雪の体験を、ある方は熱冷ましの藁が紛れ込んだ氷片の情景として、またある方は氷室（雪室）にもぐり込んで雪をかじった思い出として語っていただいた。しかし、実際に運営に携わった方々の証言はほぼ望むべくもなく、間接的な伝聞さえも貴重なものとなりつつある。石川県の氷室（雪室）の実態を解明する目的で、現時点での石川県に存在した氷室（雪室）の判明分を追加再整理して本リストを作成した。このような過去の雪氷利用の実態解明は、石川県における資源としての雪氷の利用を考える上で、ひとつの有用

な参考情報となると思われる。本リストの不備な部分がさらに加除訂正されて、石川県の雪氷利用の実態解明に資することを願っている。

## 謝 辞

新潟大学教授の和泉薫氏には、加賀市打越町の雪穴の調査結果を使用させていただきました。また、金沢大学名誉教授の河田脩二氏には、加賀市山代地区の聞き取り調査に多大の協力をいただきました。この欄に書ききれないほど多くの県民の方には、氷室（雪穴）の情報をお寄せいただきました。記して、感謝いたします。

この研究は、経費の一部を2007（平成19）年度および2008（平成20）年度の北陸大学特別研究助成金の交付を受けて行われた。

## 参考文献

- (1) 田口哲也,「水の文化史」,冷凍食品新聞社,(1994)。
- (2) 「長屋王木簡」奈良国立文化財研究所蔵。(昭和63年(1988)に長屋王邸遺跡の発掘成果として発表。木簡に都祁氷室に関する記載,進氷(氷運搬)に関する記載があった)
- (3) 井上薫,「都祁の氷池と氷室」,大阪歴史学会ヒストリア,85巻,1-30(1979)。
- (4) 竹井巖,「金沢の氷室と雪氷利用」,北陸大学紀要,第28号,49-62(2004)。
- (5) 竹井巖,「石川県における石川県の氷室(雪室)と雪氷利用」,北陸大学紀要,第30号,107-120(2006)。
- (6) 竹井巖,「大正期における明治大正期の氷室と鮮魚鉄道輸送」,北陸大学紀要,第32号,155-166(2008)。
- (7) 泉鏡花,「寸情風土記」,鏡花全集巻28,岩波書店,493-506(1988)。(p.499「氷々,雪の氷と,こも依に包みて賣り歩くは雪をかこへるものなり。鋸にてザクザクと切つて寄越す。日盛に,町を呼びあるくは,女や兒たちの小遣取なり。夜店のさかり場にては,屈竟な若い者が,お祭騒ぎにて賣る。土地の俳優の白粉の顔にて出た事あり。屋根より高い大行燈を立て,白雪の山を積み,臺の上に立つて,やあ,がばり々々がばり々々と喚く。行燈にも,白山氷がばり々々と遣る。はじめ,がばり々々は雪の安賣に限りしなるが,次第に何事にも用ゐられて,投賣,棄賣り,見切賣りの場合となると,瀬戸物屋,呉服店,札をたてて,がばり々々。愚案するに,がばりは雪を切る音なるべし。』大正9年)
- (8) 「石川県河北郡誌」,大正9年。(p.435「白山氷」同上(注:北國新聞より引用)今では金沢でも夏季飲料の氷は人工のものを用いて居るが,明治の初年は天然の雪を噛んだもので,そして其れは遠く白山の積雪を切り出し,白山氷の名はそれから出たのであった。ところが白山は遠距離であるか上に,道路が峻峻で切り出しが非常に困難なので,其後此も同じく神谷内の人々が冬季積雪を人工で貯蔵することを工風し,其れを夏季賣出して金儲をした。當時は取締規則などないので,勝手気随に何處にでも貯蔵し,夏季之を雪の氷ガバリ、と言って売り歩いていたので,雪の氷とは可笑しな名であるが,何分昔の人は夢にも見ることの出来なかった雪が,盛暑の候,而も一厘か二厘で口に入るのだから賣れること夥しく,遂に大流行となり,彼處にも此處にも貯蔵するようになり,取締規則まで設けられた。)
- (9) 井上雪,「金沢の風習」,北国出版,昭和53年(1978)。(p.131)
- (10) 北島俊郎,「金沢の氷室」,加越民俗研究,vol.11,72-81(1982)。
- (11) 池上佳芳里,「北陸地方における雪室の分布とその盛衰」,地理科学,vol.54,no.2,126-137(1999)。
- (12) 「新エネルギー利用等の促進に関する特別措置法」(平成9年(1997)6月に新エネルギーの一層の普及拡大を促進するために施行された。バイオマス及び雪氷冷熱エネルギーが利用等を促進すべき新エネルギーとして追加された。)
- (13) 森田平次著,「金沢古蹟志」(明治24年初出)日置謙校訂,歴史図書社,昭和51年(1976)。(p.222-223:「玉泉院丸氷室 此の氷室は,舊藩中は藩侯の召上がらるゝ氷雪を貯ふる室にて,玉泉院丸の築山の麓に,二間に四間の穴蔵を造り,戸室石にて積み立てたり。右氷室は手木足輕の主附にて,毎歳嚴冬の頃清潔なる積雪を箱詰めになし,此の室に納め,夥多の雪を集め箱の廻りを詰め

置き、六月朔日に取り出し指し上ぐる例なりと云ふ。右氷室は、舊藩五世参議綱紀卿の時命ぜられたる處にて、其の以前は加州石川郡倉谷より進獻すといへり。」p.224:「元禄五年に参議綱紀候倉谷四ヶ村よりの献氷を止めて、城中玉泉院丸に初めて氷室を増築し、氷雪を爰に貯え...」

- (14) 「玉泉院丸絵図」金沢市立玉川図書館蔵、78cm×103cm。
- (16) 「改作所舊記(上)」石川県図書館協会、昭和14年(1939)。(p.207-208:「(元禄十一年)来朔日氷室御祝御用之水、近年者御露地に氷室被仰付置候得共、今年者無之に付、俄之儀に御座候へ共、各様迄可申進旨、只今御廣式御番頭衆より申来候。則別紙相調進候條、右之通相違無之様可被仰渡候。以上。五月廿八日 柿崎彌市右衛門 長瀬湍兵衛殿 永原權丞殿 右之通申来候間、先年之通相認氷一荷、来朔日朝六時御廣式迄持参仕候様可申渡候。尤少も油断仕間敷候。以上。長瀬湍兵衛 永原權丞 劍村又七 吉野村甚七 當六月朔日倉谷村より氷上候付、肝煎并右持参人二三人召連、明後廿四日拙共子役所迄可罷出候。以上。(略)」, p.303-304:「氷室為御祝倉谷四ヶ村より六月朔日氷上申儀、就御尋申上候。一、倉谷四ヶ村之儀者、御陣屋之袖役相勤申候。河北郡高坂村之儀者、大鋸役相勤候に付、為御褒美天正十二年五月より諸役御免之御判之物、高德院様より頂戴仕申候。右為冥加其頃より六月朔日氷上申候。微妙院様より寛永十三年十一月右御同事之御判之物被為下。両度之御本紙者高坂村に御座候。私共手前に者寫所持仕候に付、上之申候。氷の儀者、御代々打續指上申候。微妙院様小松に御隠居被為遊候ひ而者、於金澤重丸様・萬吉様に指上申候。當御代者御入国より元禄五年迄指上申候。但、御留守之時分者上不申候得共、其以後御留守に而も御下臺所へ指上申候。御留守に上初申年号寛不申候。右先規承傳申通并近年迄、書上申候。以上。元禄十五年十二月九日(以下略)」, p.307:「元禄十六年 倉谷四ヶ村より氷上げ来候に付、御祝と唱来候儀、何御代何方より申来候儀之旨御尋に御座候。氷上げ始め申年号者、大納言様御代天正十二年五月十日に、諸役御免之御印頂戴仕候に付、為御礼同年六月朔日氷指上申候處、如何之儀に而氷献上仕候哉と御尋御座候故、今日之御祝に指上申旨御請仕、夫より毎年上げ来候由承傳申候。御祝と申儀、何方より被仰渡候と申儀者承傳不申候。只今所に而御祝之氷と者不申候得共、金澤へ持参仕指上申時分、御祝之氷指上申と申なれ候。先規之儀慥成紙而等有之候哉と御尋御座候得共、書物者所持不仕候。以上。元禄十六年正月六日(略)」)
- (16) 中村健二編著、「山の民物語 医王山西南麓の史・資料集」、北國新聞社、平成6年(1994)。(p.303-317)
- (17) 天野米作、「日本における製氷の歴史に就て」、冷凍、Vol.1(2)、25-29大正15年(1926)。(p.25-26:「(略)前田家に仕へて居た古老の話に依ると徳川幕府への献氷は寛永年間前田三代の主利常公に初まり徳川十四代家茂公頃迄年々行はれたと云ふことであります。金澤城内二の丸に二間四方の穴蔵が造られ冬季當番の足輕(手木足輕)が毎日雪を其穴蔵に詰め込み貯蔵したもので献氷の際には金澤から江戸迄の長い道中を長持ちの中に木の葉や笹を以て氷を詰め足輕が擔て運んだとのことあります。(略)」)。
- (18) 金沢御堂・金沢城調査委員会編集、「金沢城跡-金沢城跡遺構実態調査概要報告書-」、橋本鶴文堂、平成5年(1993)。(p.63:「...二の丸東区の石室(地下貯蔵庫)など、絵図に見られなかった遺構が確認された」)。
- (19) 小川孜成、「兼六公園誌」、近田太三郎刊行、明治27年(1894)。(p.28:「紅葉山 一ニ山崎山ト云。(略)又此山背ニ土窖ヲ作り。毎歳冬季ニ白雪ヲ貯へ。翌年六月朔日ニ氷室ノ慶トテ。氷ヲ侍臣ニ賜フナトノ事アリシモ。其迹陳セリ。」)
- (20) 下郷稔、「兼六園歳時記」、能登印刷出版部、平成5年(1993)。(p.38)
- (21) 「竹沢御殿并御鎮守古絵図」金沢市立玉川図書館蔵。(天保10年(1839)?山崎山の横の細長い池(堀)が「谷」と記載されている。)
- (22) 「加能宝鑑」、歴史図書社、昭和48年(1973)。(p.149:「加賀国金沢市兼六公園之略景」明治31年二月刻、「貯雪窟址」の表記あり。)
- (23) 「特別名勝兼六園[資料編]その歴史と文化」、橋本確文堂、(1997)。(金澤公園唱歌(金澤公園の歌)明治四十一年六月発行、「51 丘を後に廢る窖 百萬石の頃ほひは 氷をここに貯へて 年の六月朔日に 52 侍臣に頒ち賜ひたり つめたき氷もあつ情け 藩主の恵みいかばかり 臣下は心を暖めけん」)
- (24) 加越能史談会、「金沢故蹟誌」、大正12年(1922)。(p.7:「三兼六公園「山崎山の背にある土窟は寒中雪を蓄えたる氷室の遺址なり」)
- (25) 「兼六園庭園図平面図」石川県庁蔵、昭和11年(1936)。(「氷室址」の表記あり)
- (26) 「兼六園庭現況図」石川県公園事務所蔵、昭和32年(1957)。(「氷室遺地」の表記あり)
- (27) 長山直治、「兼六園を読み解く その歴史と利用」、桂書房、(2006)。
- (28) 森田平次著、「金沢古蹟志(下)」(明治24年初出)日置謙校訂、歴史図書社、昭和51年(1976)。(p.71:「御膳所用の魚鳥を貯うる穴近江町にありしゆえ、...」)
- (29) 金沢市近江町市場史編纂委員会編集、「金沢市近江町市場史」、近江町市場商店振興組合、(1979)。
- (30) 聞き取り20070515 (竹田武氏:高松の氷室。砂浜に作った。町の北(北新町?)。昭和15年以前。漁師さんが魚の冷蔵に使ったのでは?(調査者:竹井巖))

- (31) 聞き取り20070515 (丹羽修平氏(竹田武氏の紹介):高松町六軒町の氷室。雪小屋と呼んでいた。昭和6-7年頃の記憶。旅館の持ち物でなまもの冷蔵用。1間半から2間で深さ3-4尺。砂地に穴を掘って切り妻屋根,入り口はむしろ。(調査者:竹井巖))
- (32) 「蚕業取締成績」農商務省農政局。(大正1年(1911)版p.182,大正3年(1913)版p.198,大正6年(1916)版p.225)
- (33) 「松任市史 現代編・下巻」,能登印刷,昭和58年(1983)。(p.845,「松任地方にも,倉光,三浦などに石垣で囲いピラミッド型の屋根を葺いた「雪ノ氷小屋」があり,「いきのこおり」といって,毎年各地に売りさばかれたが,大正末から昭和初年にかけて姿を消していった。)」
- (34) 長井真隆,「黒部市金谷の雪山について」,富山市科学文化センター研究報告第6号,85-91(1984)。
- (35) 聞き取り20060926 (山田秋(永井旅館従業員,大正12年生)さん。市ノ瀬雪室について:昭和30年前後,永井旅館の冷蔵材利用,石組コンクリート作り内径5m楕円深さ3mの穴。河岸に位置する。金沢の近江町市場に魚を買い出しに行くとトラックに冷蔵庫を積んでいった。白峰雪室について:支所近くの崖の上にあった。昭和20年代。北野魚店の所有。(調査者:竹井巖:小川弘司))
- (36) 「加賀市史 通史下巻」,昭和54年(1979)。(p.757:第六章民俗と文化「7月1日…氷室は小野坂で作られていたものが最も有名で,この日になるとムシロを開き大聖寺などに売りに出されたものである」)
- (37) 聞き取り 20090910(本光寺住職 奈良諦順氏。明治以降,三代前の住職が魚町の魚屋さん(料亭清仁楼?)と契約書を交わし,十畳の氷室を運営。深かった。昭和39年に赴任してきた時には,宗寿寺との境の崖下に穴が残っていた。危険なので赴任後4,5年したころ埋め戻した。契約書が残っている。(調査者:神田健三,竹井巖))
- (38) 聞き取り 20090910(橋立町在住の酒谷江美子さん(65)。橋立には,橋立港の西側の丘陵と出水神社の境内,橋立小学校中学校のある丘陵に計3カ所の雪穴があった。西側丘陵の雪穴は,大正の中頃に酒谷さんの祖父が魚の冷蔵用途に貯蔵雪を供給するために運用を始めた。民家(田出さん)の裏山の位置にあたる崖上に穴を掘り,水はけ用のパイプを通して作った。はしごで雪穴には登り降りしていた。現在も深い穴が残っている。オタンバの魚屋さんに納入していた。小学校の雪穴はグラウンド造成で消滅した。出水神社の境内の雪穴は,新聞に掲載されたことがある。穴が残っている(径7m深さ5mのすり鉢状の穴を,出水神社拝殿の右後方の崖際に確認できた)。(調査者:神田健三,竹井巖))
- (39) 聞き取り 20090910(塩田健一氏。塩浜町の集落の海岸寄りの場所に,半地下式のコンクリート製の屋根のある防空壕のような氷室が,昭和の初め頃営まれていた。近くの海岸で採れた魚の冷蔵用途とのこと。数年前に壊されて,現況は宅地の庭になっている。コンクリートの破片が砂地に散乱している。(調査者:神田健三,竹井巖))
- (40) 聞き取り20070120 (坂口富子さん,岡田修三氏:片山津氷室跡(雪穴)。大正から昭和初期に先代の坂口幸吉が運用。魚を橋立から船で安宅今江芝山湯を経由して片山津に運び,貯蔵雪を坂口魚店の魚の冷蔵に用いた。また,雪氷を詰めて魚を電車で動橋へ運び,官営鉄道で京阪神方面に送ったという。現況は,廃材で埋め戻してある。穴の痕跡あり。(調査者:神田健三,竹井巖))
- (41) 和泉薫氏の調査:20040515(調査者:和泉薫,納口恭明。打越町の嶋田明子さんの案内で調査。雪穴①:打越町集落の東端の崖の上。現況は埋め戻され畑。縦横3間四方,深さ3間くらい。組合方式の運営。病人の熱冷ましや料理屋などに販売した。戦後はやっていない。雪穴②:打越町集落南西端の斜面の中腹。打越神社近く。カドノの魚屋(仕出し)が使用。魚などの食物の冷蔵。3間四方,深さ2間。現況は,埋め戻され宅地と庭になっている。)
- (42) 聞き取り 20050409(山下シズ枝さん(平八寿司)(83):旧春日神社境内に土地を借りて仕出屋平八が雪穴を自前で運営していた。10畳程度の広さ。食材の魚の冷蔵用に貯蔵雪を利用。冷蔵庫を導入する昭和初期まで使用。昭和30年代まで廃屋として残っていた。現在は,春日神社が移動した後に,造成されてホテル雄山閣ができ,痕跡なし。(調査者:河田脩二,神田健三,竹井巖))
- (43) 聞き取り 20050409(西山外茂子さん(68),谷本和江さん(小松魚店)(68):万松園に雪穴が2カ所(藤沢,紋谷)あった。一段低い崖下に10畳深さ5mの規模。雪を雪だるまのように転がして穴に落とし込んでいた。土地を締める丸太でつき固めた。魚の冷蔵や一般向けに供給。氷のように透明だった。熱冷ましに使った氷に藁が入っていた。人工氷を使うようにとの保健所の指導が魚屋にあった。昭和31年ごろまで運営。(調査者:河田脩二,神田健三,竹井巖))
- (44) やましろ街事典編集委員会編集,「やましろ街事典」,山代温泉開湯1300年記念誌発行委員会,(1996)。(p.28,「雪穴「ゆきあな」【習慣】氷室のこと。夏まで雪を保存しておくための穴や室のこと。深い穴を掘って冬の間に雪を詰め,わら屋根をかけておき,春以降に魚屋が氷として使用。春日山や萬松園に何カ所もあり,雪を詰める作業を「雪詰め」という。そのときには,桂谷の「かべこね唄」の2番の歌詞で,全員が脚を揃え,手を振り上げて,「今日 この穴の 雪を踏む アーヤッサン ヤッサン」と唄われた。)」
- (45) 大聖寺川上流域の歴史編纂委員会編集,「大聖寺川上流域の歴史」,大聖寺川上流域の歴史編纂委

- 員会, (2009) . (p.212-215, 四, 氷室 (雪氷りづくり))
- (46) 木戸良一, 「明照館と氷室跡」, 七尾の地方史, 第17号, 38-42, 昭和59年 (1984) .
- (47) 羽咋市史編さん委員会, 「羽咋市史 原始・古代編」, 昭和48年 (1973) . (p.606: 第一節羽咋の古墳 羽咋宝塚古墳 「『旧記』にも「先年この地に氷室を作ったものがあって地を深く掘り下げたところ土器や石器や土製の人形の面などが出ました」とみえる」, p.607: 「土面の裏面には「石川県羽咋郡羽咋町字稲荷山宝塚ヨリ明治四十一年六月雪野蔵ノ為掘鑿セシ処ヨリ発見 古川晃吉」の張り紙があり, …」)